

一夜

夏目漱石

青空文庫

「美しくしき多くの人の、美しくしき多くの夢を……」と髯ひげある人が
 二たび三たび微吟びぎんして、あとは思案ていの体である。灯ひに写る床とこばし
 柱らにもたれたる直なおき背せの、この時少しく前にかがんで、両手に
 抱いだく膝ひざ頭がしらに険けわしき山が出来る。佳句かくを得て佳句を続つぎ能あたわざ
 るを恨うらみてか、黒くゆるやかに引ける眉まゆの下より安からぬ眼の色
 が光る。

「描えがけども成らず、描えがけども成らず」と椽えんに端居はしいして天下晴れて
 胡坐あぐらかけるが繰り返す。兼ねて覚ぜんごえたる禅語ぜんごにて即興ぜんごなれば間に
 合わすつもりか。剛こわき髪を五分ぶに刈りて髯貯たくわえぬ丸顔を傾けて

「描えがけども、描えがけども、夢なれば、描えがけども、成りがたし」と高

らかに誦じゆし了おわつて、からからと笑いながら、室へやの中なる女を顧かえりみる。

竹籠たけかごに熱き光りを避けて、微かすかにもすランプを隔てて、右手に違い棚、前は緑り深き庭に向えるが女である。

「画家ならば絵にもしましよ。女ならば絹を粹わくに張つて、縫いにとりましよ」と云いながら、白地の浴衣ゆかたに片足をそと崩くずせば、小豆皮ずきがわの座布団ざぶとんを白き甲すべが滑り落ちて、なまめかしからぬほどは艶えんなる居ゐずまいとなる。

「美しき多くの人の、美しき多くの夢を……」と膝抱ひざいだく男が再び吟じ出すあとにつけて「縫いにやとらん。縫いとらば誰に贈らん。贈らん誰に」と女は態わざとらしからぬ様さまながらちよと笑う。やがて

朱塗の団扇の柄にて、乱れかかる頬の黒髪をうるさしとばかり払えば、柄の先につけたる紫のふさが波を打って、緑り濃き香油の薫りの中に躍り入る。

「我に贈れ」と髯なき人が、すぐ言い添えてまたからからと笑う。女の頬には乳色の底から捕えがたき笑の渦が浮き上つて、瞼にはさつと薄き紅を溶く。

「縫えばどんな色で」と髯あるは真面目にきく。

「絹買えば白き絹、糸買えば銀の糸、金の糸、消えなんとする虹の糸、夜と昼との界なる夕暮の糸、恋の色、恨みの色は無論ありましよ」と女は眼をあげて床柱の方を見る。愁を溶いて鍊り上げし珠の、烈しき火には堪えぬほどに涼しい。愁の色は昔しか

ら黒である。

隣へ通う路次ろじを境に植え付けたる四五本の檜ひのきに雲を呼んで、今やんだ五月雨さみだれがまたふり出す。丸顔の人はいつか布団ふとんを捨てて椽えんより両足をぶら下げている。「あの木立こだちは枝を卸おろした事がないと見える。梅雨つゆもだいぶ続いた。よう飽きもせずひとに降るの」と独り言ごとのように言いながら、ふと思ひ出した体ていにて、吾わが膝ひざ頭がしらを丁ちようちよう々ちようちようと平手をたてに切つて敲たたく。「脚気かっけかな、脚気かな」

残る二人は夢の詩か、詩の夢か、ちよと解しがたき話いとぐちしの緒いとぐちをたぐる。

「女の夢は男の夢よりも美しくしかろ」と男が云えば「せめて夢にでも美しくしき国へ行かねば」とこの世は汚けがれたりと云える顔つき

である。「世の中が古くなつて、よごれたか」と聞けば「よごれました」と紈扇かんせんに軽く玉肌ぎよつきを吹く。「古き壺つぼには古き酒があるはず、味あじわいたまえ」と男も鷺鳥がちようの翼はねを畳たたんで紫檀したんの柄えをつけたる羽団扇はうちわで膝のあたりを払う。「古き世に酔えるものなら嬉うれしかろ」と女はどこまでもすねた体である。

この時「脚気かな、脚気かな」としきりにわが足を玩もてあそべる人、急に膝頭をうつ手を挙あげて、叱しつと二人を制する。三人の声が一度に途切れる間をククーと鋭とどき鳥が、檜うわえだの上枝かすを掠かすめて裏の禪寺の方へ抜ける。ククー。

「あの声がほととぎすか」と羽団扇を棄すててこれも椽えんがわ側はへ這はい出す。見上げる軒端のきばを斜なめに黒い雨が顔にあたる。脚気を気にす

る男は、指を立てて坤の方をさして「あちらだ」と云う。鉄牛てつきう寺の本堂の上あたりでククー、ククー。

「一声ひとこえでほととぎすだと覚るさと。二声で好い声だと思つた」と再び床柱に倚りながら嬉しそうに云う。この髯男は杜鵑ほととぎすを生れて初めて聞いたと見える。「ひと目見てすぐ惚れるのも、そんな事でしょか」と女が問をかける。別に恥はずかしくと云う気色けしきも見えず。五分刈ごふかりは向き直つて「あの声は胸がすくよだが、惚れたら胸は痞つかえるだろ。惚れぬ事。惚れぬ事……。どうも脚氣らしい」と拇指おやゆびで向脛むこうずねへ力ちから穴あなをあけて見る。「九きゆう仞うじんの上いに一い簧つきを加える。加えぬと足らぬ、加えると危あやうい。思う人には逢あわぬがましだろ」と羽団扇はうちわがまた動く。「しかし鉄片が磁石に逢おう

「たら？」 「はじめで逢うても会えしやく釈はなはなかる」と拇指さかの穴をを逆さかに撫なでて澄あましている。

「見た事も聞いた事も無いに、これだなと認識するのが不思議だと仔細しさいらしく髯ひねを撚ねる。「わしは歌麻呂うたまろのかいた美人を認識したが、なんと画えを活いかす工夫はなかるか」とまた女の方を向く。

「私わたしには——認識した御本人でなくては」と団扇ぼんのふさを織ほい指ほに巻まきつける。「夢にすれば、すぐに活いきる」と例の髯ひげが無む造ぞう作さに答こたえる。「どうして？」 「わしのはこうじゃ」と語り出いそうとする時、蚊遣火かやりびが消きえて、暗ひそきに潜ひそめるがと出いでて頸筋くびすじにあたりをちくと刺さす。

「灰しめが湿しめっているのか知らん」と女が蚊遣筒かやりびを引き寄よせて蓋ふたをと

ると、赤い絹糸で括りつけた蚊遣灰が燻りながらふらふらと揺れる。東隣で琴と尺八を合せる音が紫陽花の茂みを洩れて手にとるように聞え出す。すかして見ると明け放ちたる座敷の灯さえちらちら見える。「どうかな」と一人が云うと「人並じゃ」と一人が答える。女ばかりは黙っている。

「わしのはこうじゃ」と話しがまた元へ返る。火をつけ直した蚊遣の煙が、筒に穿てる三つの穴を洩れて三つの煙となる。「今度はつきました」と女が云う。三つの煙りが蓋の上に塊まって茶色の球が出来ると思うと、雨を帯びた風が颯と来て吹き散らす。塊まらぬ間に吹かるときには三つの煙りが三つの輪を描いて、黒塗に蒔絵を散らした筒の周囲を遶る。あるものは緩く、あるもの

は疾く遶る。またある時は輪さえ描く隙なきに乱れてしまう。

「茶毘だ、茶毘だ」と丸顔の男は急に焼場の光景を思い出す。

「蚊の世界も楽じゃなかる」と女は人間を蚊に比較する。元へ戻りかけた話しも蚊遣火と共に吹き散らされてしもうた。話しかけた男は別に語りつづけようともせぬ。世の中はすべてこれだと疾うから知っている。

「御夢の物語りは」とややありて女が聞く。男は傍らにある羊皮の表紙に朱で書名を入れた詩集をとりあげて膝の上に置く。読みさした所に象牙を薄く削った紙小刀が挟んである。巻に余つて長く外へ食み出した所だけは細かい汗をかいている。指の尖で触ると、ぬらりとあやしい字が出来る。「こう湿気てはたまらん」と

眉まゆをひそめる。女も「じめじめする事」と片手に袂たもとの先を握つて見て、「香こうでも焚たきましよか」と立つ。夢の話しはまた延びる。

宣徳せんとくの香炉こうろに紫檀したんの蓋があつて、紫檀の蓋の真中には猿きざを彫

んだ青玉せいぎよくのつまみ手がついている。女の手がこの蓋にかつ

たとき「あら蜘蛛くもが」と云うて長い袖そでが横なみに靡く、二人の男は共

に床とこの方を見る。香炉に隣る白磁はくじの瓶へいには蓮はすの花がさしてある。

昨日きのうの雨を蓑みの着て剪きりし人の情なさけを床とこに眺ながむる荅つぼみは一輪、卷葉は

二つ。その葉を去る三寸ばかりの上に、天井から白しろ金の糸がねを長

く引いて一匹の蜘蛛くもが——すこぶる雅がだ。

「蓮の葉に蜘蛛くも下りけり香かを焚たく」と吟うたじながら女一度に数すう弁べん

を攫つかんで香炉かうろの裏うちになげ込む。「しろうしよあかつてこかず
蛸しやう懸か不ち揺かず、篆てんえん煙ちくり遶り

ようをめぐる
 竹 梁」と誦して髯ある男も、見ているままで払わんとせぬ。
 蜘蛛も動かぬ。ただ風吹く毎に少しくゆれるのみである。

「夢の話しを蜘蛛もききに來たのだろ」と丸い男が笑うと、「そ
 うじや夢に画を活かす話しじや。ききたくば蜘蛛も聞け」と膝の
 上なる詩集を読む気もなしに開く。眼は文字の上に落つれども瞳
 裏に映ずるは詩の国の事か。夢の国の事か。

「百二十間の廻廊があつて、百二十個の灯笼をつけろ。百二十
 間の廻廊に春の潮が寄せて、百二十個の灯笼が春風にまたた
 く、朧の中、海の中には大きな華表が浮かばれぬ巨人の化物の
 ごとくに立つ。……」

折から烈しき戸鈴の響がして何者か門口をあける。話し手は

はたと話をやめる。残るはちよと居ずまいを直す。誰も這入つて来た気色けしきはない。「隣だ」と髯ひげなしが云う。やがて洩蛇しふじやの目を開く音がして「また明晩」と若い女の声とする。「必ず」と答えたのは男らしい。三人は無言のまま顔を見合せて微かすかに笑う。

「あれは画じゃない、活きている」「あれを平面につづめればやはり画だ」「しかしあの声は?」「女は藤紫」「男は?」「そうさ」と判じかねて髯が女の方を向く。女は「緋ひ」と賤いやしむごとく答える。

「百二十間の廻廊に二百三十五枚の額が懸かつて、その二百三十二枚目の額に画かいてある美人の……」

「声は黄色ですか茶色ですか」と女がきく。

「そんな単調な声じやない。色には直せぬ声じや。強いて云えば、ま、あなたのような声かな」

「ありがとう」と云う女の眼の中には憂をこめて笑の光が漲ぎる。

この時いづくよりか二疋の蟻が這い出して一疋は女の膝の上に攀じ上る。おそらくは戸迷いをしたものである。上がり詰めた

上には獲物もなくて下り路をすら失うた。女は驚ろいた様もなく、

うろうろする黒きものを、そと白き指で軽く払い落す。落されたる拍子に、はたと他の一疋と高麗縁の上で出逢う。しばらく

は首と首を合せて何かささやき合えるようであつたが、このたびは女の方へは向わず、古伊万里の菓子皿を端まで同行して、ここ

で右と左へ分れる。三人の眼は期せずして二疋の蟻の上に落つる。

髯なき男がやがて云う。

「八畳の座敷があつて、三人の客が坐わる。一人の女の膝へ一足の蟻が上る。一足の蟻が上った美人の手は……」

「白い、蟻は黒い」と髯がつける。三人が齊ひとしく笑う。一足の蟻は灰吹はいふきを上りつめて絶頂で何か思案している。残るは運よく菓子器くずもちの中で葛餅かいこうに邂逅して嬉しさの余りか、まごまごしている気合だ。

「その画えにかいた美人が？」と女がまた話を戻す。

「波さえ音もなき朧月夜おぼろづきよに、ふと影がさしたと思えばいつの間まにか動き出す。長く連なる廻廊を飛ぶにもあらず、踏むにもあらず、ただ影のままにて動く」

「顔は」と髯なしが尋ねる時、再び東隣りの合奏が聞え出す。一曲は疾とくにやんで新たなる一曲を始めたに見える。あまり旨うまくはない。

「蜜を含んで針を吹く」と一人が評すると

「ビステキの化石を食わせるぞ」と一人が云う。

「造り花なら蘭らんじや麝じゃでも焚たき込めばなるまい」これは女の申し分

だ。三人が三さん様ようの解釈をしたが、三様共すこぶる解しにくい。

「珊瑚さんごの枝は海の底、葉を飲んで毒を吐く軽薄の児こ」と言いかけ

て吾に帰りたる髯が「それぞれ。合奏より夢の続きが肝かん心しんじや。

——画から抜けだした女の顔は……」とばかりで口ごもる。

「描えがけども成らず、描えがけども成らず」と丸き男は調子をとりて軽

く銀ぎんわん椀たんを叩たたく。葛餅かちもちを獲えたる蟻あぎはこの響ひびきに度どを失うして菓子椀かしわんの中なかを右みぎ左ひだりりへ馳かけ廻まわる。

「蟻あぎの夢ゆめが醒さめました」と女おんなは夢ゆめを語かたる人ひとに向むかつて云いう。

「蟻あぎの夢ゆめは葛餅かちもちか」と相手あいては高たかからぬほどほどに笑わらう。

「抜ぬけ出でぬか、抜ぬけ出でぬか」としきりに菓子器かしきを叩たたくは丸まるい男おとこである。

「画えから女おんなが抜ぬけ出でるより、あなたあなたが画えになる方かたが、やさしゅう御座ござんしょ」と女おんなはまた髯ひげにきく。

「それは氣きがつかなんだ、今度こんどからは、こちが画えになりましたよ」と男おとこは平氣へいけいで答こたえる。

「蟻あぎも葛餅かちもちにさえなれば、こんなこんなに狼狽うろたえんでも済すむ事ことを」と丸まる

い男は腕をうつ事をやめて、いつの間にやら葉巻を鷹揚おうようにふかしている。

五月雨さみだれに四尺伸びたる女竹めだけの、手水鉢ちようずばちの上に蔽おおい重なりて、

余れる一二本は高く軒せまに逼れば、風誘うたびに戸袋えんをすつて椽えんの上にもはらはらと所えら扨えらばず緑りを滴したたらす。「あすこに画がある」

と葉巻の煙をぷつとそなたへ吹きやる。

床とこばしら柱かに懸かけたる扨ほつす子の先には焚たき残る香こうの煙りが染しみ込ん

で、軸じやくちゆうは若ろが沖かの蘆雁ろがと見える。雁かりの数は七十三羽、蘆あしは固もとよ

り数えがたい。籠かごランプの灯ひを浅く受けて、深さ三尺の床とこなれば、

古き画のそれと見分けのつかぬところに、あからさまならぬ趣おもむきがある。「ここにも画が出来る」と柱よに靠よれる人が振り向きながら

眺める。

女は洗えるままの黒髪を肩に流して、丸張りの絹団扇を軽く揺がせば、折々は鬢のあたりに、そよと乱るる雲の影、収まれば淡き眉の常よりもなお晴れやかに見える。桜の花を砕いて織り込める頬の色に、春の夜の星を宿せる眼を涼しく見張りて「私も画になりましょか」と云う。はきと分らねど白地に葛の葉を一面に崩して染め抜きたる浴衣の襟をここぞと正せば、暖かき大理石にて刻めるごとき頸筋が際立ちて男の心を惹く。

「そのまま、そのまま、そのままが名画じゃ」と一人が云うと「動く画が崩れます」と一人が注意する。

「画になるのもやはり骨が折れます」と女は二人の眼を嬉しから

しようともせず、膝に乗せた右手をいきなり後ろへ廻わして体をどうと斜めに反らす。丈長き黒髪がきらりと灯を受けて、さらさらと青畳に障る音さえ聞える。

「南無三、好事魔多し」と髯ある人が軽く膝頭を打つ。「刹那に千金を惜しまず」と髯なき人が葉巻の飲み殻を庭先へ抛きつける。隣りの合奏はいつしかやんで、槌を伝う雨点の音のみが高く響く。蚊遣火はいつの間にも消えた。

「夜もだいぶ更けた」

「ほととぎすも鳴かぬ」

「寝ましょか」

夢の話はつい途中で流れた。三人は思い思いに臥床に入る。

三十分の後^{のち}彼らは美しくしき多くの人の……と云う句も忘れた。

ククーと云う声も忘れた。蜜を含んで針を吹く隣りの合奏も忘れた、蟻^{はい}の灰^{ふき}吹^きを攀^よじ上^{のぼ}った事も、蓮^{はす}の葉に下りた蜘蛛^{くも}の事も忘れた。彼らはようやく太平に入る。

すべてを忘れ尽したる後女はわがうつくしき眼と、うつくしき髪^{ぬし}の主である事を忘れた。一人の男は髯のある事を忘れた。他の一人は髯のない事を忘れた。彼らはますます太平である。

昔^{むか}阿修羅^{あしゆら}が帝^{たい}釈^{しやく}天^{てん}と戦つて敗れたときは、八万四千の眷^{けん}属^{ぞく}を領して藕^{ぐう}糸^し孔^{こう}中^{ちゆう}に入^いつて蔵^{かく}れたとある。維^{ゆい}摩^まが方丈^{ぽうじやう}の

室に法を聴ける大衆は千か万かその数を忘れた。胡桃^{くるみ}の裏^{うち}に潜^{ひそ}んで、われを尽^{じん}大^{だい}千^{せん}世^せ界^{かい}の王とも思わんとはハムレットの述懐と

記憶する。粟粒芥顆ぞくりゆうかいかのうちそうてんに蒼天もある、大地もある。一い世つせい師せいに問うて云う、分子ぶんしは箸はしでつまめるものですかと。分子はしばらく措おく。天下は箸の端さきにかかるのみならず、一たび掛付け得れば、いつでも胃の中に収まるべきものである。

また思う百年は一年のごとく、一年は一刻のごとし。一刻を知ればまさに人生を知る。日は東より出でて必ず西に入る。月は盈みつればかくる。いたずらに指を屈して白頭に到いたるものは、いたずらに茫ぼうぼう々たる時に身神を限らるるを恨うらむに過ぎぬ。日月は欺あざむくとも己れを欺くは智者とは云われまい。一刻に一刻を加うれば二刻と殖ふえるのみじゃ。蜀しよくせん川十様の錦、花を添えて、いくばくの色をか変ぜん。

八畳の座敷に髯のある人と、髯のない人と、涼しき眼の女が会して、かくのごとく一夜を過した。彼らの一夜を描いたのは彼女の生涯を描いたのである。

なぜ三人が落ち合った？ それは知らぬ。三人はいかなる身分と素性と性格を有する？ それも分らぬ。三人の言語動作を通じて一貫した事件が発展せぬ？ 人生を書いたので小説をかいたのでないから仕方がない。なぜ三人とも一時に寝た？ 三人とも一時に眠くなつたからである。

(三十八年七月二十六日)

青空文庫情報

底本：「夏目漱石全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年10月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑摩書房

1971（昭和46）年4月～1972（昭和47）年1月

※底本本文では、「※[#「虫+蕭」、第4水準2-87-94]」は、「虫+嘯のつくり」とつくってある。しかし、底本の注記では、「つくりにくさかんむりのある「※[#「虫+蕭」、第4水準2-87-94]」が用いられている。下記の異本とも照合の上、当該の箇所は「※[#「虫+蕭」、第4水準2-87-94]」で入力した。

「倫敦塔・幻影の盾」岩波文庫、岩波書店

1930（昭和5）年12月20日第1刷発行

1990（平成2）年4月16日第23刷改版発行

1997（平成9）年9月5日第30刷発行

「倫敦塔・幻影の盾」新潮文庫、新潮社

1952（昭和27）年7月10日初版発行

1968（昭和43）年9月15日20刷改版発行

1997（平成9）年4月25日69刷発行

入力：柴田卓治

校正：LUNACAT

2000年9月11日公開

2011年12月5日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一夜

夏目漱石

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>